



野尋禾の
ついのべ
その四
(2009/12)

まえがき

”野尋禾のついのべ その四 (2009/12)”です。

第四弾にして、ついに、回文ついのべが登場します。

”回文ついのべ”とは何か？

回文とは、上から読んでも下から読んでも”よのなかばかなのよ”というやつです

。

”ついのべ”とは、ツイッター上の小説。

一四〇文字以内（ハッシュタグがあるので、実際は、一三一文字）の小説。

”回文”かつ”ついのべ”——そんなことが可能なのか？

可能なのです——回文にとりつかれた馬鹿には。

私は、ある日、突然、回文にとりつかれてしまいました。

寝ても覚めても回文を考え、あらゆる言葉を無意識のうちにひっくり返している。

その病の進行の過程で、必然的に発生したのが、回文ついのべ、なのです。

回文が成立するように言葉を探し、物語をあぶり出す。

ひたすら言葉をひっくり返してはつなげてゆく作業。

あえて言えば、物語を構築する作業ではない。

そこに、作者の意図は存在しない。

潜在意識の見えざる手が、脳のひだをまさぐるだけ。

じつを言えば、自分のついのべを読んでいて、他人の作品を読んでいるような気分になることがある。

回文ついのべでなくとも。

自分ではないものが指に宿り、紡ぎださせたのでは、と。

そんな魔性の文学。

一四〇文字の物語。

あなたの暇を潰すために生まれた、ハンマー、あるいはペンチ、または……

収録作品はすべて、twitter で発表されたものですが、修正を加えたものもあります。

本ファイルに収録された作品の著作権は、野尋禾／nohironogi／佐々木秀博に帰属します。

HP : http://www.geocities.jp/nohiro_nogi/
mail : nohironogi@gmail.com
Twitter : [@nohironogi](https://twitter.com/nohironogi)

月、蟹、そして、回文ついのべの誕生。(2009/12/01 - 2009/12/10)

#twnovel

新しい仕事ができる。
簡単なお仕事です、と彼女は愛らしく笑う。
運送業の一種。
特殊なのは、時間指定と扮装。
届ける相手は眠っているので、どうでもいいようなものだが、彼女が譲歩しない。
僕は赤い服と白い髭できめて、彼女の子供の枕元にプレゼントを置いた。
報酬はこの寝顔かな。

2009/12/01 (Tue)

#twnovel

かつて、昭和の終わりを感じさせる死があった。
戦後の終わりを感じさせる死があった。
今日、画壇の重鎮が逝った。
しみじみと二十世紀の終わりを感じている。
いや、しみじみしてる場合じゃない。
俺の人生が終わりそうだ。
まず、そのナイフ置け。
俺の話、聞けって。
え、あ、ちょっ……

2009/12/02 (Wed)

#twnovel

みんな月のせいにしよう。
だって、こんなに明るくて、大きくて、妖しい。
貴女の影が、こんなにくっきり見える。
夜なのに、おかしいじゃないか。
この光を浴びて、僕は僕じゃなくなる。
さあ、行動しろ、僕。
と、振り返る貴女。
「早く、声かけてくれないかな。もう、うち着いちゃうよ」

2009/12/02 (Wed)

#twnovel

画壇の大家が死んだ。
わしも引退だ。
若い頃から奴の贋作を描いてきた。
作風を会得するために、人生を犠牲にしてきた。
それも終わりだ。
そう思っていたところへ、ブローカーから電話だ。
霊媒画家になれ、だとさ。
笑わせる。
やらせてもらうさ。
たしかに、奴の魂はわしの中で生きてる。

2009/12/02 (Wed)

#twnovel

最低の夜、最低の街、最低の俺が歩いてる。
夜目がきかなくなった。
空腹には慣れたけど、風に飛ばされそうだ。
公衆電話から実家に電話した。
婆ちゃんが出て、思わず切った。
友達にかけたら説教が始まって、やっぱり切った。
どんづまりだ。
顔をあげると、満月だけが最高に明るかった。

2009/12/02 (Wed)

#twnovel

”おはよう”とクライアントで投稿し、更新。
TLに”ランチなう”という文字がある。
まだ八時だ。
投稿時刻は正午過ぎ。
なんの誤作動だよ。
設定を見直すと、”現在以降のTL取得”がチェックされている。
外したら、項目じたいが消えた。
TLは普通に戻る。
あれ？
いや、まさかね。

2009/12/03 (Thu)

「あなた、まだ発たないんですか」
「もう少し、いいだろう」
「はい、なごりおいしいですね」
「いろんなことを思い出すよ」
「ええ、だいぶ気をもみましたしね」
「駄目な子ほど、というやつかな」
「私たちは見守るだけですし」
「その任務も終わった。地球は地球人に任せよう」
「はい」

2009/12/03 (Thu)

寒いから、北のほうに来てるんだろう。
船底で作業しっぱなし。
外のようにすなんて、揺れ具合で想像するしかない。
凧、時化、ピッチ、ロール、ヨー。
日にち数えるのもやめた。
ただ、手を動かすだけ。
何も考えるな。
何も望むな。
いつか終わる。
それだけは本当だ。
さあ、蟹を作れ。
蟹を。

2009/12/03 (Thu)

ルールはシンプル。
対戦相手を十秒間フォール。
それだけ。
世界中の格闘家が食いついた。
ただ栄光のためだけに。
賞金はない。
その決勝戦……九、十。
最強王者が誕生した。
だが、王者は知っている。
真の王者は自分ではない。
「また、この子は乱暴ばかり」

王者は母親に K.O された。

2009/12/05 (Sat)

#twnovel

宣戦布告はなかった。

この戦争は、もはや外交の一形態ですらない。

気がつくとき、引き戻せないところまで来ていた。

音のない霧雨が作ったぬかるみに腰まで浸かっている。

社会が、人心が蝕まれる。

世界が変わる。

見えない敵に、我がほうの切り札は期待できない。

巨艦巨砲の宇宙戦艦は。

2009/12/06 (Sun)

#twnovel

”籠”と呼ばれる土地があった。

村外れの竹林。

村人は、そこで材料を調達し、竹細工を作る。

もちろん、竹籠も。

それが”籠”と呼ばれる由来と思われていた。

真の由来を伝える家系は絶えていた。

時代は移る。

重機が竹林を切り拓く。

頭上の竹林に封印されていた龍が、覚醒の時を知る。

2009/12/07 (Mon)

#twnovel

「どうして誘ってくれたんですか？」

嫌だった？

「いえ。でも、話したこともないのに」

そうだった？

「外回りから帰社して、顔を見るなり、鍋食べない？って」

ああ、そうそう。

今日は寒くてねえ。

湯豆腐とか鱈とかが恋しくてさあ。

白くて温かいものに条件反射したんだ。

「はい？」

2009/12/08 (Tue)

#twnovel

あの年寄りには関わるな。
シマ荒らしは気に入るまいが、身のためだ。
あの服、最初は真っ白なんだ。
それが、一軒、一軒とまわるうちに赤く染まってゆくんだ。
あのでかい袋だって、最初はからっぽなんだぜ。
一晩かぎりの荒稼ぎ。
北から来て北へ帰る。
まあ、風物詩だと思いねえ、兄弟。

2009/12/08 (Tue)

#twnovel

笑わないあの子を笑わせたい。
でも、どうしたらいい？
学校じゃ教えてくれない。
”笑”という字を調べた。
竹籠にはまった犬の滑稽な様だという。
犬に籠を被せてみた。
失敗だった。
彼女は犬に同情して、泣き顔になった。
僕は、浅はかな自分を恥じ、旅に出た。
金のガチョウを求めて。

2009/12/08 (Tue)

#twnovel

七日七晩、一心不乱に祈った。
クリスマスの中止を。
八日目の朝、天使降臨。
「申請は受理されました」
その年のクリスマスはなくなった。
僕は異変に襲われた。
やたらと女の子と目が合う。
話しかけられる。
非モテな僕にモテ期が訪れたらしい。
こんな代償でいいのか。
いや、いいんだ。

2009/12/09 (Wed)

#twnovel

だいぶ都心を離れた。
ベッドタウンを過ぎ、乗客もほとんど降りた。
この車両に残るのは、若い男女、さえない中年男の私だけ。
若い男女は見るからに憔悴していた。
絶望し、世界の果てでもめざすみたいだったが、私より先に降りていった。
私ひとりだけが、世界の果てのホームに降りた。

2009/12/10 (Thu)

#kaibun
#twnovel

作為。
殺意。
「仕方ないさ」
泣きながら震える。
エルフらが
「泣きなさいな、タカシ」
「いつさ？ いくさ」

2009/12/10 (Thu)

愛する人を裏切りました祭り、そして、回文ついのべの暴走。(2009/12/11 - 2009/12/20)

#kaibun
#twnovel

「どけ！ いいね、稲荷……」
「黄昏、忘れた？」
「紳士のカメラなら、メカの紳士たれ！ 座れ！」
「画素、足りないね。いいけど……」

2009/12/11 (Fri)

#kaibun
#twnovel

「イタリア句会か？ で、出んぞ」
「まあ、旦那」
「なんだ？」
「アマゾンで……」
「でかい！ かくありたい……」

2009/12/11 (Fri)

#kaibun
#twnovel

「駄目だ。よいよい……よい長坂。寒いから。朝から雨。」
「あら、傘？ あら。」
「皆無さ。傘が無いよ。いよいよ、駄目だ」

2009/12/11 (Fri)

#kaibun
#twnovel

「駄目な奈良……」
「生意気。さて、今年の漢字、”新”か。いかん、詩人か」
「熨斗と小手先」
「今なら斜めだ」

2009/12/11 (Fri)

#kaibun
#twnovel

「大体……」
「だから？ 憧れ？」
「その、なんか違うが……」
「痴漢なの？ それがコアラ、か」
「……大体だ」

2009/12/11 (Fri)

#twnovel

その本、高いと思う？
本の売り上げはねえ、出版業界全体への寄附なの。
わかる？
売れなくても有意義な本を世に出すためには、売れるけど無意味な本で稼がなきゃ

心ある消費者は両方を買わなきゃ。
どっちも買えない人もいるのよ。
さあ、書店を買い占めなさい。
脳が喜ぶんだから。

2009/12/11 (Fri)

#twnovel

タイムズスクエア、N.Y。
私こと友愛軍大佐と同少佐、米帝への破壊活動を実行中。
ギターデュオとして実演、CD を一ドルで販売。
CD はPC で再生されると、ネット経由で政府のサーバーを破壊。
演奏終了。
警官が近づく。
少佐、ギター型銃で発砲。
倒れた警官の手には一ドル紙幣が。

2009/12/11 (Fri)

#kaibun
#twnovel

遠ざかる雪。
苦い魂、また幾すじも。

後、稲妻は見え、笑みはまず無い。
血の文字、救い給いし。
また、伊賀に消ゆる風音。

2009/12/11 (Fri)

#kaibun
#twnovel

石井、食べた。
「嘘だ！ パン美味しい！ パンで感激も……でも、期限か」
「電波……石井、音波だ！」
そう、食べたい、椎。

2009/12/11 (Fri)

#kaibun
#twnovel

「イタいわ。イタメシ食って、また中島みゆき？」
「妻は出待ちに……」
「昼、何する？ 出前？」
「うん」
「魔女自慢、魔女自慢……上まで留守になる日にちまでは待つ気？」
「由美、マジかな？」
「多摩テック？ 閉めたいわ」
「痛い……」

2009/12/12 (Sat)

#kaibun
#twnovel

そこに行けと。
御しるしに気づき、また見るな。
生きとし生ける暗い夜の舞を舞う。
何卒。
何か欲しいなら松任谷由実、生きて歌うたう。
敵意見ゆや、烏と。
つまらない死。
他に謎と担う魔を、今、告るよ。
イラク流刑。死と奇異なる御霊の気づきに知る紙魚。
時計にこそ。

2009/12/12 (Sat)

#kaibun
#twnovel

愛しき時と残り香。
夏の日の”愛してる……”。
「でも、遠い関係だし……」
凧いだ海面。
占い試し、奇談じみて微塵。
「抱きしめたいなら運命、か。だいなしだ」
「意見かい？」
音も出る手。
恣意。
あの日のつながり。
この時、解きし問い。

2009/12/13 (Sun)

#kaibun
#twnovel

義士は揃いし。
いつ動くか。
もとより我が身の今宵よりのちのこと知らず。
軋り、聞くか。
不敵にこそ、彼のもの、御霊とる、と。
また、身のものか。
そこに来て、深く斬りし傷らし、と。
この血糊よ。
いよ、この身代わりよ、とも。
覚悟。
討つ意志、色。
そは仕儀。

2009/12/13 (Sun)

#twnovel

孤独は伝染する。
科学者の研究成果だ。
孤独を感じている人の友人は孤独を感じている、という。
思いあたることがある。

沢山の友達に囲まれていても、孤独感に襲われる。
死にたいくらい。
このなかに保菌者がいる。
早く、そいつを見つけないと。
胸に杭を打たないと。
あたしが死ぬ前に。

2009/12/13 (Sun)

#twnovel

天下り官僚が悪人なわけじゃない。
彼を知り、そう思うようになった。
天下りしなかった元官僚。
引退者の集まる倶楽部で知り合った。
出身官庁こそ明かさないが、国際問題に詳しい。
詳しすぎる。
「要人暗殺の要諦はね、肉親に殺意を抱かせることさ」
この男、どんな道を歩いてきたのか。

2009/12/13 (Sun)

#kaibun
#twnovel

「なんてことだ。移転？」
「たしか、市内に」
「姑息な……」
「盗んなよ！」
「駄目？」
「頼みこむなら」
「払う。金か？」
「うらはらな婿……身のためだよ」
「なんとなく」
「そこにいな」
「しかし、探偵だと……」
「古典な」

2009/12/15 (Tue)

#kaibun
#twnovel

「大物になる靴？ 何足？ 知らん？ 気でも…… いい。まあ、なんだ。のるわけ

だしな。外せ、萌え眼科」

「考えもせず。話だけ？ ワルの旦那。甘い。芋」

「出禁らしく？」

「そんな」

「作る」

「何、飲も」

「おお」

2009/12/15 (Tue)

#kaibun

#twnovel

「年末ですね」

「そうだな」

「あ」

「おお」

「年始、予定ある？ 映画でも行かない」

「洋画？」

「近いけどな」

「凄い。最高」

「うどん、どう？」

「う、濃い」

「最後、砂時計か。違うよ、田舎」

「芋で、言える相手よ」

「知んね。大穴だ」

「嘘ね」

「素でつまんね」

2009/12/15 (Tue)

#kaibun

#twnovel

否、知りたいさ。

が、理由、問うより、ジングルベル。

なぜか要るわけ、秘密の言葉。

恋知らぬ妹よ。

今や、病。

与党も犬らしい。

小鳩、この罪。

ひけ、悪い風邪。

鳴るベル、軍事利用、問う。

百合が咲いたりしない。

2009/12/15 (Tue)

#kaibun

#twnovel

まるで崖。

誰かの意志。

また、進化する夢、結いし仲間。

「いくら？ そ？ 終わるの……のるわ。おそらく、今……」

悲しい夢。

許す。

監視、魂の。

彼だけが、出る間。

2009/12/17 (Thu)

#twnovel

また豪華なクルーザーが着く。

まばゆいエアロックを抜けて本物の宝石を着けた脂肪の塊が入店。

葉巻を受け取ると端を噛み切り、点火。

たっぷり吸い込み、ゆったり吐き出す紫煙。

やっとな余裕が生まれて、なじみの客と挨拶。

衛星軌道上の高級喫煙倶楽部。

地球圏に残された数少ない楽園。

2009/12/18 (Fri)

#kaibun

#twnovel

「嘘よ、デマ。さあ、飲もうよ」

「まさか狐つきが来て、囁いただけか？」

「竹馬の友。直談判しようよ」

「駄目だよう」

「予審、パンダか？」

「地元の博打。賭けだ。タイヤ、笹」

「敵が狐つきか。さまようもの……」

「朝まで……よそう」

2009/12/19 (Sat)

#twnovel

スノウ・フレイク・ジェインは雪の中。
結晶の中で眠ってる。
小さな凄い狙撃兵。
雪が融けるまで目覚めない。
街の黒ずんだ雪に紛れ、じっと動かず、待機する。
夢さえ見ない低活動状態で。
見えない銃で確実に、敵を撃ち抜く日のために。
一斉蜂起のそのときを。
春という名の革命を待つ。

2009/12/19 (Sat)

#twnovel

ベビーカーの子供が泣き止まない。
車両に乗り込み、僕の前に止まった時から。
泣くのも仕事。
寛容にうけとめていた。
が、母親が僕を睨みつけている。
人間以外の何かを見るような目で。
「何か？」
「マスクつけてください」
車内でマスクなしは僕だけ。
もはや、マスクは顔の一部らしい。

2009/12/19 (Sat)

#twnovel

衛星軌道上の高級喫煙倶楽部。
紫煙にけぶる地球の眺望はまた格別の趣。
もはや大気圏内にこの煙がくゆらされる場所は存在しない。
喫煙は富裕層のなかでも限られた人々だけの特権。
倶楽部で供されるサービスも極上。
「昔の喫煙所は無料だったらしいね」
「ほう、無料でこんなことを！」

2009/12/19 (Sat)

#kaibun
#twnovel

遠き時と伝え残る.....彼方から、その子。
闇に散る血、繰り返し。
言葉、その眼、秘めたる望みのみぞ、告るため。
姫のそば、とこしえか。
陸、散る地に。
都の空、刀狩る近衛、起つとき。
疾き音.....

2009/12/19 (Sat)

#twnovel

古い木造校舎に卒業生が続々と集まる。
しっかり記憶に焼き付けようと歩き回る。
皆、私が出した葉書を手にしている。
私は校長。
卒業生でもある。
やがて日暮。
卒業生と在校生が校庭に集合。
朝礼台で一言つつ述べ、松明を手に校舎へ。
「みなさん、最後のキャンプファイヤーを始めます」

2009/12/19 (Sat)

#twnovel

定年後、父の無口に磨きがかかった。
家をあけることも増えた。
何日も帰らないことさえある。
微笑みを絶やさない母を見るのが、息子としては辛い。
そんなとき、テレビ画面に父を見て、絶句した。
「あら、言わなかったかしら？」
と微笑む母。
今年度宇宙公務員採用者の記者会見だった。

2009/12/19 (Sat)

#twnovel

愛する人を裏切りました。
それから、暗い道を歩いてきました。
歩き疲れて、立ち上がることもできません。
そんな私にさした一条の光。
それが貴方です。

今までの日々は、貴方に会うための準備だったと思うのです。
どんなことでも耐えてみせます。
でも、こんな女、信じられませんよね？

2009/12/20 (Sun)

#twnovel

愛する人を裏切りました。
そんなことができるとは思いませんでした。
愛していたのは本当です。
きっと、あの人を愛する自分の心も裏切ったのです。
そのとき、心は壊れてしまいました。
だから、もう何もわからないのです。
だから、見ていられるのです。
十字架を背負い、歩くあの人を。

2009/12/20 (Sun)

愛する人を裏切りました祭り、そして、回文ついのべの暴走。(2009/12/11 - 2009/12/20)

#kaibun
#twnovel

「いいな、向井。きちんと見えよ！」
「駄目だよ！」
「えい、とんちき！」
「い……」
「かむな！」
「……いい」

2009/12/21 (Mon)

#kaibun
#twnovel

たちまち回文の日。
「さあてゴン爺、先手打つんか？」
「新聞紙でな」
「またあ……」
「やる。あれ、見ろ」
「誰かいる」
「悪い彼だろ？ 見れ」
「あるや！」
　　頭撫で
「新聞紙貫通！ 天声人語で、朝日のん？」
「ブイ！」
「勝ちました！」

2009/12/21 (Mon)

#twnovel

「銀河鉄道なんて空想の産物だ。星系間に軌道を敷設して、チューブ状に力場を発生させ、その中を列車が走る。無邪気な幻想だ。もし、そんなものが建設できたとしても、維持できるわけがない。少なくとも人類の技術では無理だ。」

そう言って、豪快に笑う衛星軌道鐵道公団代表だった。

2009/12/22 (Tue)

#twnovel

そのひとは、いつも対岸を見つめていた。
「長い旅をして、やっと辿りついたので。でもね、どうしてもこの川が越せない。みんな待ってるのに」

後年、僕は町を出て、長いこと帰らなかった。
が、急に里心ついて、帰郷の途に。
だが、故郷への橋の手前で、足を止めた。
向こう岸に老婆の影。

2009/12/22 (Tue)

#twnovel

貴族に知り合いはおらん。
見たこともない。
下賤な輩の前には姿を見せないのじゃろう。
しかし、どうも、見ていないときにはお出ましになるようじゃ。
それも冬の間だけ。
気位が高いんじゃろう。
いや、短気なだけかもしれんが、よく決闘をした跡がある。
ほれ、そこにも手袋の片方が.....

2009/12/22 (Tue)

#dajare

#twnovel

時に、西暦二〇一二年.....世界が滅亡するその日、その時、紫の薔薇の人が呟いた。

「マヤ、可憐だ.....」

2009/12/22 (Tue)

#kaibun

#twnovel

射る手。
あの滝は、魚の憎しみを知る。
死せる剣、夜空ぞ、よぎる。
吊るせ。
しるしを見し国の王は、北のアテルイ。

2009/12/22 (Tue)

#twnovel

船が揺れる。
船だから。
もう何日もひどい時化だ。
真冬の北洋だから。
この船、いつまでもつのか。
船底に詰めこまれた俺達も、いつまでもつのか。
ライトテーブルの光だけが明るい。
黙々と手を動かす原画マン、動画マン。
送られた絵を直す作画監督は杉並区。
逃げ出せない俺達は北の海。

2009/12/22 (Tue)

#kaibun

#twnovel

「泣いた？」
「今でこそ、な」
「見習いたいおおらかさ」
「会いたいよ。また、あの頃みたいに……」
「ここにいた！ 見ろ、この頭！」
「酔いたい……」
「朝から？ おおい！」
「平らな水底で舞いたいな……」

2009/12/23 (Wed)

#twnovel

サンタクロースは不安定。
世界中の子供の人数だけ、厳密に言えば、深夜の時間帯の地域の子供の数だけ、同時に存在しなくてはいけないから。
この一夜のために、北極で蓋然性を高めてきた。
それでも、プレゼントを置いた直後には蒸発してしまう。
朝の光の中で、一人の老人に収斂する。

2009/12/25 (Fri)

#kaibun

#twnovel

「ん？」

「はい！ さあ、大掃除。入れんぜ、ゴミ箱。どけ！」

「けど……」

「どけ！」

「けど……」

「どけ！」

「けど……」

「どけ！」

「けど……」

「どけ！」

「けど……」

「どけ！」

「けど……」

「どけ！」

「けど……」

拒み、午前零時。

「嘘おお……」

「浅井はん！」

2009/12/26 (Sat)

#kaibun

#twnovel

「消ゆる雪や。外、出ろ」

「今年、寒いから黒タイツ」

「餅も丸い。轍も孤。泣き虫……勝つ、な」

「懐かしむ、きなこ餅だわ。入間……」

「餅もついたら。蔵かい、武蔵？」

「ところで？」

「屠蘇や！」

「消ゆる雪……」

2009/12/26 (Sat)

#twnovel

厳しい修行。

厳寒の滝に打たれるなんて序の口。

生命の危機を何度も経験した。

満身創痍だったが、自分が変わってゆくのが実感できた。

そして、ついに、老師の眉毛を一本、抜いた。

免許皆伝だ。
山を下りると、真っ先にツイッター。
見える！
見切っている！
TL が止まって見えるぞ！

2009/12/26 (Sat)

#twnovel

真東京電波塔は無事に完成した。
しかし、その後も工事は続行。
さらに高く伸び続けた。
世界一の高さを越えた後も。
地上から見上げると、一本の細い線が空に消えてゆくように見える。
先端部で作業しているのはロボット。
すでに人間の領域ではない。
しだいに、人々は空を見なくなった。

2009/12/26 (Sat)

#twnovel

辺境の惑星に不時着した。
救出のめどは立たないが、住民には厚遇されている。
あるとき、大砲の試射に招かれた。
が、それがへろへろで話にならない。
紙切れに弾道計算して渡すと、将軍の目が光った。
このとき、俺はまだ知らなかった。
自分が宇宙開発の父と呼ばれることになろうとは。

2009/12/26 (Sat)

#twnovel

螺旋階段に惹かれた。
子供の頃から、どういうわけか気になった。
好きでも嫌いでもない。
ただ、気になる。
そのビルの螺旋階段を見た時、これはいけない、と感じた。
理屈ぬきで。
それなのに、上ってゆく。
地下から漏れるジャズがフェイドアウトしてゆく。
一段、一段、そして、空が……

2009/12/26 (Sat)

#kaibun
#twnovel

神酒が椀みたし、明けぬ夜。
見知らぬ青山、その 哀しみが人。
虚しい戦艦。
見るテレビ、死す。
痺れて、流民。
歓声、死なむとひがみし中の。
存在せぬらし見る世、抜け、あした見ん、我が君。

2009/12/28 (Mon)

#twnovel

何年ぶりの帰郷だろう。
記憶の中の故郷は雪景色。
しかし、今年は北国も雪がない。
いや、一軒だけ雪に埋もれている。
我が実家じゃないか。
隣のおばさんが出てきた。
「もう何年も溶けないの」
そのとき、実家から布団が飛んできた。
「布団がふっとんだ」
父の絶叫。
あんたのせいだ。
寒。

2009/12/29 (Tue)

#twnovel

なんにでも嘘と本当がある。
その両方の面が。
あれが本当でこれが嘘、なんてことはない。
誰も信じない、と言ったな。
世の中の人間すべて欺いて生きてきた、と。
そんなのは嘘の人生だ、と俺も思ったさ。
だけど、それなら、この痛みは嘘か。
おまえの刃が斬ったこの傷は。
流れる血は.....

2009/12/30 (Wed)

#twnovel

宿命を知った日から、人生が変わった。
僕はひよわな少年ではなくなり、泣きながら強さを身につけた。
ふりかかる火の粉のような敵を倒し、時には命を奪い、ひたすら走り続けた。
あと少しで核心に迫ることができる。
辛い旅が終わる。そんな時になぜ、他の人生を想像しているんだろう。

2009/12/30 (Wed)

#twnovel

その先にあるもの。
それをこの眼で見たい。
それだけを願った。
暗黒の泥沼の生活にも耐えた。
友を裏切りもした。
数え切れない敵を作りもした。
こうして生き永らえているのが不思議だ。
今、私は機械の脚で長い階段を上っている。
大勢の人々と一緒に。
成層圏から初日の出を見るために。

2009/12/31 (Thu)